

卒業を認定します

私が小学校の頃、通知表は学年の「修了証書」も兼ねていました。通知表の裏に「第〇学年修了証書」と印刷されていて、第3学期の終了式には各学年の代表が通知表の束を校長先生からいただきました。このことは証書の授与によって当時は学年毎に進級を認定していたこととなります。では、当時、認定されなかった者、つまり原級留置(落第)はあったかという私の記憶ではありません。私自身もたぶんありませんでした。

ところが、昭和40年代になると、学年毎の修了証書はほとんど姿を消してしまい、学年修了の認定儀式もなくなりました。通知表は成績表の役割のみになりました。

さて、進級認定には大きく2つの考え方があります。

1つは「年齢主義」、もう1つは「修得主義」という考えです。

年齢主義は子どもの年齢によって決まった学年に所属する形態で、同一学年には同じ年齢の子だけが在籍して原級留置はありません。一方、修得主義は実際に学年相当の学力が身に付かなければ次の課程には進級できない考え方です。

日本はかつては修得主義でした。しかし、戦後個々の人権意識や平等・公平意識の高揚とともに年齢主義に変化してきました。

ところで、先日開催された2月の定例職員会議に「卒業認定」という議件がありました。3年生の卒業について認めるか否かを判定する会議件です。私は躊躇無く「3年生全員の卒業を認めます」と宣言しました。

進級認定に年齢主義が浸透している現在、「卒業認定」にどのような意味があるのかという疑問も確かにあります。しかし、私は「卒業認定」には確固たる意味と効果があると信じています。

卒業や進級は時期がくればかつてに行われるものではなく、子どもたちに成長の区切りとしての意識の変化を求めるもの、あるいは変化の芽生えを期待するものだからです。私は年齢主義がいかに定着していたとしても、進級や卒業の「認定」はおごそかにそして格式をもって行うべしと思っています。

『3年生77名一人一人の卒業を認定します』